花鳥餘情

自巻三至巻四

内閣文庫
番號 和 27304
冊數 14 (2)
函號 203 6

内閣文庫
和書 類
二七三〇四 號
一五 冊
二〇三 函
三 架

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

花鳥餘情第三

空蟬　夕顔

日本政府圖書

並 帚木巻ハ 横ことへしくつかはらまし 松木の
摘ぶ巻ハ 紀ぶの 雨夜のしなさため 空蝉ある事
廿巻せ一まてはわかく 年紀をかて あらはす
一丈まての中に 横ほそきるありあり 末摘
花の巻ハ 初ハ若紫 同時乃年紀にて 末ハ若紫
より後の年紀にかゝる 彼空蝉 此巻ハ 夕顔の前なり
夕顔ハもくたしせり
稀にれ給ひぬれは　これハ第木のぬ巻の
詞につゝきてかきつかはすれ 中川のやとりは給
へるこのこと

日本政府圖書

明治十二年購求

内閣文庫

源氏をさしおきてぬしらは　これは小君か事を紛れ
のかれまいらせ給ふか空蝉のおもはくをひきとる事なり
やうくつきなくてやみ給ふなりとおもふらくまし
空蝉のきみ此源氏になびきなさぬ事なきつゝ
紀伊守か此一段の詞なれはいてゝおもふつるきやう給ふ
二条院の東院にうつろひ侍しにさうらはれはまかなひ
にしの院のこと　いよのかみか女空蝉のゆくへなり
これあやのつきうちなるあかなるらあるんとくにてめ
の葉末月なとわかは思ふてつきのちはこさる思ふくに
さ思ひやるさることのなりけ此ハさうるおもふときき
此きこえはこれうちきの事とこきこしさきにて係る
下河あたりくまなきのみなる事こときとあるさまなり

りなとおもひ侍り
ええそくなきこと〳〵く　晴の本まて此詞あ
りけん合てて見しきしたいえのくしうめかこ
みえぬくわ此あるに侍側とかくあきえなる心と
らるおもへるなし
おくの人はいと静かにのとめて
此源氏の君のいまみは東のつまとわかまさまるに
こやか給ひて母やの柱によりそひゐる人は空蝉のきみ
なりいまひとりはきのしへむきさま柱へよりのかれ(?)みた
ましのかたにむかひて東むきなれは母屋の柱によりかゝれる
軒端はしむきなれは出てゐるわみ柱にしかはおく
のかたなれはむかひてあはせておくの人といふへく

西の海のうへはおくにみやこともあらぬよみかんかくしのう
さくむきまる在へなるへし
然るにちかころおもへるに尤ちは地にて文字といへるかんかく
いよの在きてよきとしゝつかみお
六花集に古きとてあせわいよの在き（備のく）こにかくれは古は古
いにしへは十六年にて廿三あつといつて新撰まるなれ
つけまよしと書にて文素か説には在きこのかれ西ー
廿九とさへわたりの説にお達せずして文
いよのむ何ある時西宮に侍る梅にてし
あやうかる人なわかは いしの海に此年くらみる水をて
すてれたるやうたわ
まきかへしあいきやうつきたのしきを

すまの浦のこ此巻之
あはれさとはおもひきのうあやしくしきは人の心あさくれさえし
まいなしぬ人絶てすまの浦のこととゆへつく
つゝみあはうつくるおもしろけれ 後葉の詞之
とさまちつるわひんを 戸のくさの浅茅ちりくる葉之
きゝえもわぬるしらる世んやちりしおもはれ
見よては空蝉の君に恋しわすれしる哉旦暮ありぬを
うつるとはきて枕してぬ哉
なほくしくあさましきはよのつねなるをさかりにみなる
て我人にまつるる人世にふく
いとまくはてかつれ 小君か詞之あつれはくるしくもあ
ぬといふかんなわ

お前なるをとこなるか　おい人は源氏君を何といふとも知で何
事もつゝしみわたるお前の女房まてあらそひとおもふら
同御前にみあやまりけるとみけるきさめ房なれは源氏
をまことおもひける小君か姉の君をさきにつまてなか
あやしくそとせける也をとこは御局にとゝめてしらせて
ゆへゆきとまり給はんとは小君かいまよみ姉のおもと
のうけにもしくなかも給はんかなといふ也
ことは殿の戸よりいそかひて　源氏の君なるか
御そといえよりひとつやさうかへひ給へる　老人は源氏を少将
の君とおもひまさしかとて抱つかはれるゝ
ゆくりきこえてあるをかしく　まことのゑんなるをきゝてある
あらはしくとらひとゝめ給ひきいぬるゝ

空蝉の巻は衣くさき末木にある人からのなつかしき事
源氏もそめる衣のぬを給ふといふ人からはせみのからに
よせらるゝ也
かの人いふはおほえしと　はしの事つれなく
もとのみになるはしら　さんしれたるかはこふは捨つらしみ
給へるあ姉きみに文をつかはしめ給ふ小君たち右によせる
しらおもひくる也

並二　夕顔

源氏十六歳の夜より十月まての事みへたりわたりまて
帚木の並也此巻承詞あるによて名く
六条わたりの御忍ひありきの比
六条の法皇所のすみしめていひ出をとわ

めのと　源氏乃ちめのと皇子のおほんめのとハ二人ある人をき
こゆ親王のめのとハ三人なるへし下れ給ふにハくらむ人あ
またあるやうなれともちかき乃御すちハ大弐乃さしつき
惟光のめのとにてあるを惟光の母なるへし
たしとミ　下ハつくしをさし板をはらかりてしとミにしたる
里あたりにハあるやうにしつらひ車にも半蔀と
てありかのしとミをあけあけまへの簾をは名付る也
はされたりしかといまハそれ又かやうなるものあまた
はそいしんつゐかくらのし給へさけるをとなん
源氏のきこえあやうく人にあやしれとにきこえひまなく
ある也花のすち四のすちあんくまて隨身も手つからこそ
あらしまつるたすわ

このをちかたも　この古き文字乃まへるしこれもの紫
ふうひ人とてあり紫式部かまたもつくれ山なときこえさう
とおもひまくるにや
むめくしうぬ　桃しくしめぬ梅の桃実なりぬ也
しろきあふきのいとこかしたる　きこれおもしろうかて
絵まや下内侍よう法師とかくとしふかしとなと
いむとのこゝしよ　尼になりてハ秘戒をとなうるなり
しろかねてゐるきよそみる白露の光そへたる夕かほの花乃
夕かほハ女の名のみにきこえてありし露乃光ハ源氏に
よそへてゐるへし河海に夕かほを美人にたとへたるを
の世にうつ宴なるにおもひせさるへし夕かほの花ハいやしき
うきよみにさし花なれたる女も我身にきよへてゐるわ

我と為人と自称すへき事にあらさる由之
毛詩に歯如瓠犀といへる為人の歯は瓠のやうに
きよくうるはしき事にあれは宮のやうにみぬこと
なるへし
やかのちけれる人の家にたゝん
与文といへるは九条殿にも更に家人なとの世
に認むるは法園乃作之して九条殿は月輪入道関白
乃事之河海にのせたる事もあやまれるとかりに
兼実なるへし
はらからの中にあらぬとちらにきこえつく
其うち中のにあらぬ後撰十九の十四のにとかへ前
これあるも

ゆんさしのあふには　六条清輔和の事之
昨る夕日みらんわかみく　夕つけの森は高むさの森
かへさるなるへし
うちわく傳きくらんたる　新古乃荻の事
枕草子にいひつとしらせまうしう　中川の荻をしも春の
ちたまへ事なとをしくすへてすかんゆきやうえ俤の
かみに向はしいおもひ給なり
もとのうち乃いとあはれていて　西行の花乃内事之
すきさへたちめしめすに心たりの世給へとあり空蝉の君か
母なるまちにかならんとあめのまのかめりめうちて
なるへとおとろひそふし給ひてつゆなきものねへさ
つみゆるさるやうなり

いまこそはぬしつよくなるとも　秋の萩のなけき之
むきこそしとしつかうんハいとおしかるへし
六條のさわのさけてこるらしをとさまくいひなひつし
まちかひてりくしわてつまさんハいとおかるへき之
さうとてよ和なるもしらこそまとひのやうる
是ハ落つ乃薄御なとのやうまおもふなるらんまとひ
なさき抱とて六條こそうの牢様おもひるゆへ緑之
まとひのおとらけなし　御息所ハとししやけ絵星宮氏
の其事似事なきことたち
時なるるらつるてふちハ佐めともおしてるとさこく組のめておけ
あさつかハ中将乃君るまてふるる之ハ胡うかるめそとて
ころきる之毛詩ニ有女同車　顔如舜花とあり

おしきたるさふかひるらかの後さ此そしくとさてめそれ書ける
さしぬきの赤紫ときさ花乃升なまし　てて
きふひ章ハ章ちせえるらハむと人かさるのあてめつさみて
あられかやをときすくしそのうへつは男乃さしぬきぬきさか
めくしきいてくらなるへし
こそこつのあろわ乃らいまみ　されみつのとなすつの
いまうんのめしろる流きるる人続あつわとくるく
井稲なそつれちまわこるこも緑ひぬま　乃井稲をいさ之
あるらつかとてつくおつし　年まて人のこくとあそ給
略く此くつこのふかるしまおちぬ書れハやさうし
しくてとそくしろく
君ハ流たゆしつくまて　こそこつちあつうわら流るるく

こゝろつきたらハ　中将のめしたりけるハいと心やさしき人なりと
いへる夕顔の宿にさしつき頭中将のよそほひなとよりも是を
見しあらゝかにきこえつるをあはれにおもひよりてなかめしく
こしかのあふさきとはまちかけけるにたゝ人もやと
雨夜の物かたりに頭中将のかたりし常夏のおもひよりそ
きこえたりとこそいへせて頭中将といひやらぬをそのたまふを
ころそらハ物かたしくわかきをとこにハ夕かほのことく見えし女
筋とものことそれいのやうに人はさしせて頭中将といふて
それをとりなしてまたまたこえけれとわさとまうしぬのしよ
ひとたひのおもふかくまちかけしたまふあまりのことくとかれみつら
源氏の君なるよしこそ
かくさしはしまれたるはいのちをしつ　夕かほのやとへ光君の御
あかしおきし一年ハ七とせくしけるハ御時のおもかけをとゝめ
書たる人　そのかみをやつしたる様く
いとあやしきすまひをこのみて　夕顔のやとにかよひ給ふおもあ
しくもえものくるしきありまうて夏かくすか絵姿ハ
そのかたくなまくさせんとてまてあつまるなく
むかしのよきものゝつたへをめてゝ　二九年　縁河海ニの
注に大将とも大臣ともハ一称各名く三品大納言
乃ひるすくしは大非いかなる因縁にてかく各ニ始言り
給ふらん非のいさむる道なりぬとハかゝる事にもあるなる
書籍ふをとゝのへあるし　大伴ふハ御みつたまり
よろつぬ法ともあるし　よろつぬハ始終あるましきなく
いはまうきつゝあるらん多くそれられ給へつ

これハそらされ給への心なり
思ひきて給ふやうと　思ひハ人のきゝぬをいろ〳〵することゝもに
定家卿ハ小夜のねきて給ふやとあり　兵家のいふは
あらせよといひなしけれハとなり
さとさるゝ竹　ねさひて月やうと見と　いふにおなし
又のなかれきうくれ　詩十月篇に八月在宇九月在
戸十月蟋蟀入我床下とあり　此をきゝてなくひ
給ふるはりんてはさし　あるてかやうに　あるハ我床下に
入とよめるにやあらむ
もろこしあらせるにれ家のありかたなり
もろこしあらせのさぬに落葉のこゝろをきゝてる　てし
いさよふ月にゆつるなくあなたら月んるをいさよふといひ

ゆふにやれしかんとて十六日の月はともち月よりもちてかくに
つるにいてやすらふといふ也　十五夜にあかて
此月こそをしきいりての月はやはりつれぬになみる
つきにや
うれにたへかくし給へまいかの袖に沈みかる夜一両にたちるにや
又扇をさしかゝして出雲にそうくれてんにやみかつ
かなし
夕霧にてもい花はいつのまよりにみゑしえぬことにき
なもうくはうくしうかくあそしるるにたるえハ縁く
あまのこなれハ　宿もさとめれといふへく
あさうしなるゝとてうしとうハかくしひ給
ならのこと女方いかにつきてはそ給すむ　女御とかしよせて

我身乃人にしられぬハなかなかよしとこそみ
えハ文にもしぬとなむ
あはらんふくみる人くるしきにゆてなし 是ハ宗祇法師の
末之源氏の君これおもひくらして行つるさまにて郭公なれ
るらや
あせしこそとる きこゆる親乃身にはつきもぬまするもなし
なかいめんハ泣きぬめん勝口の戸これたまへハとつかハ表一割は
内裏町のふるを奏にて後侍臣のなかいめんをあらい
めんとふ名謁をしふ殿よりは御とのみせる侍臣まての
ななめとうらくなのる事に武沢は勝口のとの井と
中あるとの井中とらふも名謁と同きて勝口ハ廿人
を親くいつまし表割の事なれていらくふけぬるかな

とつきて
うまくしてうくまといふれたるをいふ親のうくれたるあるやう
なるらん
親のあしきも忘しくと
宗法師俊源庶之時関大人是之晋氏邪神不為世之 延長八年清涼殿霹靂之後貞
見季部之祀
いにしへのくらゝ不思しき事にておもひ行ける あはれにあはれ
うき事まに中しるしさつきおもひしぬくちとんあとうちまつ
もけるはる涙をいなられあく枕子表行は路之初拭
涙を作りまするハ汰んて
ありしみぬる人ふれ ありなれるにて
神らさなとおもへるにまして 夕らくめくくるせ後ふるハ八月

内閣文庫

六日のごとく九月ハ朔日より御神事之卅ヶ日の
穢にふれ給ふよりて参内なともしきりなく
むつきまて無礼くみりの中なりしきこゆる事ありし之
けさハおもしろうつゆへくちむ右近乃君もおもしろのあま
りも若き身なれけてらせなんとふる事と
わらひとりいれまりしかりぬハなし　杜子美は死別已呑聲
生別常惻々と清き御すまひはなれ別ハなしき
物く
はまみたるに　紫宸川の流之隋野河段といふつるにと
おなし紫宸川のつゞきをつむなきもなく
ゆゑいひくるしくして　よくひとことまで思ひこさん清け
納言も枕草子におなしき説なきよしもなし河

海はみえこわ
あし給ひまて　わかれをあはれむ心ちしてとかの詞あり
同事く治清の法を思ふもあはれむとうらしくある
あはいとのもゆかしく言はあはれハおもしろくとらむ
やはらか説の宮の詞誠におもしろくおもけしかららみ
ところぬをいはなるとつくみとぬるよいかなるかおもひはらぬ
室嫁の君みなもおもひたつぬらハ源氏の病悩とおもと
ひとあせらぬめり同称かるぬハわかりひ称ふ疑ひとおもしき
うんく
海はいかくとるよたのむ　いなかうつひなきところへ
いまつうひなしやるいくよし　半なら
いなかうひなしとハ源氏の君をおもはすてゆくにころす

なれとのたまふて
空蝉の世はうき物としりにしを又ことの葉にかゝる命よ
うつせみの世とはむなしき世といふ心にいはゝおもひくちさる
此文とて是結くるのこのかたる筋をとかきて
形乃そぬ事をとわすれ給をぬを源氏の方に空蝉乃
世とよりん給へるはもぬるとわきを給んぬによ哥をかへ
蓋ぬ事は頼乃なるとめきはへしけるさぬをとゝろ
うの事とつるとは　折ふの萩ぬ来く
きよろつる心は書る給へかや　梅おもへるよ書するうつる文いまさる
をきよろとつるといふて源氏のきみぬなつてひ給しなか
ふなれもうく哥をして乃給へるく
その人此卌九日十月四五日のうる卌九日にあたるへくそん

さらもの世めして願文つくらせ給
重明親王家室藤原氏卌九日願文後江相公朝綱
本朝文粋生者必滅釈尊未免栴檀之煙楽尽
哀来天人猶逢五衰之日　此願文之内之
形くしは我ぬに申細をいつきのよるをけてみ給へ来
未生乃要会ることゝもするへく
こうちきは夜のなりぞあれをまくいのち様のきぬよて空
きる　蓋ぬもの哀は夜此こうちきて様の挑哀来はみ此哀之
乃ころぬとて乃してつるもしくるく
るしきをふとうゝし二遍よ給のうしらぬ秋の葉こ卵
るすしは夕つかのくれとくく哥をつもうるは空蝉のくるわ
たらいつまでも人のきらぬ事形までも人きれぬ事後

くるしうてまうとつゝきかうて
ゐつのくくしき事ハ此一段ハ夢の作としれ詞し
捨つ乃ほかうとかよき事ハいかに事あしき事ハあし
此事みてあるべき様一向にうきゆせハわくしもと
やうなれどもあうのまうに表るしときてゐると互に事
おぼつるしハおよくうつしくまゐる事あれども先ハそ
井をね新中して首略してうつしゐるところなり
されてうてまし

花鳥餘情第四

三若紫

源氏の君十八歳にてつゞきてかくも若紫の禅寺に
よひきたる野べの若草此言はいろ衰ゑの名かへて若
紫とつゞきたる詞ハみやこ乃武蔵野の姫君をば若紫と
と名付侍るハ藤壺のめ御の姪にあたる君なるによりて
さるハ此君の詞に紫の色ハましてゆかりといへるにあたる
しみつき人の心にあはれなるをみつけてあはれなる様を
つまとこそまれしき心にゆかり絶えまいとわの源氏
十七歳乃三月より冬までの事みえたり
わらハやみ　瘧病也　寒熱あり毎日にやむをハ日おこり
といふ日をへたてゝおこるハ隔日瘧といへり

よしなひらなと　よしなひハ厳術なりしさまくの事ともを
あり枕草紙に三提醍醐血といふ事を誦してを
癡ハあつことニつかかぬハよそ数の陀羅尼の如く
めしまつるもしこゝなおいてやうてもろのことをきいて得ぬ
肉散院癡病とていて世にれ時天台座主良源僧
正をとめきまし事ハ天元四年の秋の事也小野宮太政
読まれしかり時人仏良源僧正を礼しやし時被穏
輦車并執杖阿闍梨二人を後更に大僧正に
山のさくらハやうくさかりをもし　いかなるも人まの花ハ都乃
元比をもそく後さきのわくしと云り
ぬしの山さかうしれたけ　なふかしのゝけハ総してハ木をも
さなもくつれおしてハあさやかのとけをいふつきなや也

花の事をいつく
枕こそみるめとおもふるしくあまの作そこのさ数めきなり
しくいはるまこそりしめとこなつし
山ふさき所との　青山院の正面ハ西萱書院花山院
西鶴枕草紙芳く
かもし花いろみしくうつくし　おきねき時ハいかなくこうん
さし琉ハとねとことくれよなかてるをあをしくてくくう
くしうくきといつえんなり
秋のあきうなりやつしきこ極る人を　萩壺女御の事也
紫をとハ女院の院あいやまありれハいとよくおやか語つきてそそろ
初草のおひもくすゑもちりぬまないろてら露のきえんとすらん
わか草のたまとめつしきことのえあらしれく物をおもひさるらむ

ゑしらなをの　佛にまつる香くを名香とはいふ　半紙様
檀香を名ある香といふ
ほとけなきさわとなとよのつね人におほしなしく
この姫君はよく十楽むらの中なれはまたあさぬ常な
乃いと世のおもひをわすれて辞退やきわりん也ふるく
その名をわらひかつけなとのやうにあらんとさけをさみて
れ給ふなめり
この女房と菩薩いひてかたく給はつらん　源氏の君紫にめう
いはみし給ふ時祖母の御かよふ君乃おほしくんあらせうたぬ
わか草と口すさみ給しをと源氏乃君のきこえ給て初草の
いは若葉の上を見つるよりその給ふをあまえんはこれをきこえ給
歴ていうてかきて給ふんとあやしくおもひ給へかまへと聞え

枕ゆふこよひはかりの露けさをみやまの苔にくらへさらなん
おく山の苔乃衣なくてなんいつも露はこほるゝさると
尼君の初草の歌はとふらひにあへさるひはおほえぬる
なれともわれ旅寝の袖も露そかわかぬそうちの返しとか
給ふなり
わかくさのとききこえ給ぬ　奥山の苔はいつも露きつき
なれはえかくしとはいつくの袖よあひなきを書きめて
給ふんのし
あしる人つくなる法せられてはおもしろかりなん
さまてはあまりきみはいまた源氏の君ははやめんし給はれ
かの君のあはれにて人つくるきこえは源氏のきみ
乃しのはともしかるさまのなめり

佛ハおのづからこそ　よろづにかきとゞめの法しるべくハくるしきに今生も(?)
さとりたまふよし　あまたのこゝとの給ふことを佛おのつから
とハ身つから佛なしのあさきもかわらぬ事ハ佛にも説(?)
しらせ給ふことなり
おなしさまなのし給ふをかみにあひにあさき世給へ
われ〳〵花紫ハ紫式部にあつて源氏の家をあらはす(?)
まなびを給へかくしてひにあさき世給へとの給ふを
法花三昧をこなふ堂乃世をしのふ名山観音四種三昧
ある不常行常坐半行半坐非行非坐乃四種之法華懺
法ハ半行半坐乃三昧也懺法ハ天台大師の式観音(?)
式作給ふ也ハ六時に六根の罪を懺悔する法也
さりしく身に秘めなしきとる心ありてさらにやあらぬる

みだれ給ふまでにやと申給ふ　源氏の源のをはれ紫乃
帝にとりみぢかくなるにつきてさうしくみる神(?)なし　まうしあぐる
ハ紫式部の西東によみ給ふ也とあるハこれにこそハするを
紫式部の秋月に筆をたてきみなれ給ふとかいつたるなれ
ある紫の物語を作りの所ハ事さへならぬといつたん
世文案に二首あつし源氏の君乃法かなふべしとすめるなれ
さもあれやハ紫式部の筆法よみ給へかたくて下の詞
みだれ給ふにきこゆやときこゆる給ふとかや
名をもとめぬ本草　白氏草堂記云雑木異草蓋覆
其上緑陰蒙々朱実離々不識其名四時一色
ふかし　そのわのちるひ給ふハ　紫式部はなはだ乃筆なれバ
聖徳太子のくるしまさぬ給ふかきるちんつかれのすみれ(?)

さてそれにして　百済国より金剛子のわたりたる事ハ元興
寺資財帳九云甚多迦子金剛子此ハ百済国王献之
よしあるを聖徳太子乃数珠の縁ハあまた出し侍りしさ
もあるハとりわきて作る事なといひしハひとへ人常の津
人まくまかのある花のやうなるをみくに給ハ人みのきらかふ
枝よりくるをもあるをきくにくくよみ給へる也あやしき色の返事
乃うへ山よりかへりてハ源氏のきちかふるつれつれとよみ給ふことを
うへむすとふいふおかしくおほしつゝてらの事をいふ人めつらしき
あはれなるのちきりなれてらうちあへていはまほしきものかな心ち
のさまなれ給ひつらん　上乃僧都の事まて老源氏とハ僧
聖人をさとくしく悔ありの出家するよせてといふる此詞まゝ
いつくにの色をそへてるおかし給ひつらん　それハ文字まゝ給ふ

藤つぼ乃女御まかて給ひつるとあやしうおもへる給ひ女にしへ
きあいハをしなれけらやうにおもふみるに給ひやまの
給ふなり
そのほかにつけて給へるさてあるに　河海にはしらみとも
之のとるにつけるおもひつゝのまゝ給ふるハ宮治のまきにみえ
よりきよしとみまてハをましきまや嫡妻記にみえ侍り
難波のつゝえ枝ハ無今此宗式部度枝二ことに式部にて
御とくらる門もすむしく黒法門にて其式又度枝一
さまく菓子ハ砂金なとの色くつみく同度様
をあそくきうに色はるとうに頭をしつくきみ星とり
不引ハある説也
ちあちつるき　こつぼ乃御病かうくての大納言か家の性

うはうきてしまいて世なりしもしたならつきさと云事也
あさか山あさくも人をおもはぬになど山の井のかけはなるらん
これはかなるあつかひとゆる つこと葉もあれとみゆるならす
あさか山をいひて古今の序乃詞を以て此歌
入る人をなるらんハ新古今集乃本歌をおもひよせる也
わかみをあさくはおもはぬといふて
汲そめてくやしときゝし山井のあさきながらや影をみるべき
元よくやしくも汲そめてけるあさくたる袖のぬるゝ山
乃井のかの前ならてくみそめてくやしといふ心
ハなかとくむはかるちつきたりてハねつてとくやむ事く
まへきれを古きつがとみるものにてやるといふ事さと
えゝろく

これみつをおとしての御使 これ光こと前ちうの家尼
上ハゆきとおとしの事をさりいましあひのしをさりつく
藤つぼの宮乃此ゑつてひ給ふ事ありて
三月四月乃比なりし事なるへし
宮ハあさましき御事をおもひしつまる 光りわたるは
源氏君ハ女御へもつたひちつき給ふる事此詞にみえたり
なをそれらしきおほつまなきうちをしか行たるもとも
源氏の心は藤つぼの女御のとなとそちとなかりなるおり
世すみそていとつよきあつめ世なれはこれ給ひし人の心をおもひ
つくさせ給ふと世の中のならふるおとぬしよくつきとハ
あまたありなりてあまりてなるある詞也
くらゐのらぬやとうしとてまわりしおかし給へとあやまちなるみしう

よりて　くらゐ山しとこえてまかりいでてとかく　いひて
六帖二
よろしきたん　と東氏前にくらゐ山よりくらゐ山をこえ
きこえてはある前なりけるもこの詞にはしきこえたるあるや
んは春のそれやしあくまてもそのしくきたるやうにいとよ
おしきとく　京極中納言ての詞とわかるはある前
くれいまよりみの山に花もちるあつきこしぬ夏やさゐぬと
やそらせぬくらゐの山をとらしみつてたるゐの春秋夏秋冬や
こうのわたくしやてんあるこされくい夏前後さぬ夏にれいても
源氏の夏みくらにやこのてまさるしとよみ行へるも秋明
と夏にあそこるやといふこはくうきこえ後ゐぬ夏も同事之
さえぬ夏といふはぬまゐちの夏にあしはなかれたきこえ
とはいへしきこゆるに人やてんには秋風乃ふき枯乃くる

めしすへなつさまさしく
やうゆゑならさはねるぬしくして近年なきわいれをわれ続ちさえ
志てくは詞く上東門院の法名は大政門人乳
二月ものわすれなきまぬを志れてみそてまつりしを
みつさはうわ月とうかきるはもある夏薨女御をうしなふ
なう給てく三月ものわはなきも給ふてく此三四月の此御
くらわてくひともにはてきるましくもる時源氏の宮ちるゝ
よる侍しにわた穏姫あつて和月法なる二月はみつされ
みなるくさきるとるる月とつきるゆるもくいちうさるぬなう
うくゆゑあれるしの二月十余日に次条院はうまれきせ
多年十一ヶ月にあされぬるや
御母のこの年令ぬ　浅茅ふお違るを一本に御母のと

子の弁命婦ハ清少納言のことき人乃子號弁
命婦といへる親ハ平中弁と為婦といへる句を
きりこれハ二人乃名とれ弁を清少納言のことく取合せこ命
婦との二人なり又めの名も弁命婦と句はさりぬハ弁
命ふハ人の名也
源氏の君もおとろくしてさふらふことなる萬葉集み給ふへき
とハ源氏の物乃うへに清少納言おき給へくに給なへつ
世継之こさまの清萬葉にあまたありけるなりさてあけれ也ぬ
といふへし
そのなかにはしめさらひめありて古歌ハ源氏の沢を成ていふ人
の清少ハひらきかへしなへの事之河海に左遷乃
事といへるハいつのことあれ仍ハ左遷ハ朧月夜の事に

これまた萬葉の清少納言に桂之子ハあれたる所之
こなた萬葉あまたまて人まさるなとしの給を世く　萬葉集
の萬葉ありて萬葉といへるおもひ出の萬葉にてきたる所乃事のこ
桂之く萬葉と言ふハ清少納言とみる萬葉集
萬葉と云ふまさし萬葉し殿ある字治の御を言ふ萬葉にみ給
し新之脱形の萬葉と云ハ善悪つきてこれの萬葉
下国の老萬葉にみしらぬ十八年まして三十三年なりにし
滝の左色筆をとみしらぬ文庫なりてあるなりか
むかし源氏の君乃清萬葉にてみ給きんへきとなし
御あそひやかしおかしきそれはたれも宮かれ源しくなる
かふなそこし
多の山のと人ハおもひしらかなりて生給ふまへ　其業とのうち

紫上ハちゝ宮のいそきなりわさとて五十の賀をさせ給ハんと設へき
あやしきまさる陰祝おもひ 逍遥公集 是なんとハとおもひけるなるへし
まさる袖おもひハまさりて冬夜つくゑのはしまて
月乃おもしろき夜にて殿のなとしてあけしらせる
此君のひかる所ハそれにまし六条京極のあたりに
つくりて六条に昔の宮の事をとりてやおほしめしける
いつくあはれなる所のこころなと中宮の御ふるき宮のほとり
君乃けさしき也
夕のあはれといひくしたる紅のくれなゐまさりなるなと
ておもしろく又らく式部卿宮老病にて平愈せさるや
いかにけなきまたの一ゝ思ひてもしらおあらまほしくなむ
えなしぬるあ君のいはひを源氏の君み一日ハきこえぬ
やうに侍しにもなかきをいひたるをはしめの此ハちかき侍る
なるよし見えたる一夜ハよみてやう侍るなりやう乃事
昔よりいひつたへある事也
姫の夕ハましてなほつやの此事なり
きよそん所にあきこともあるし 尼君のことなり
十月ハ朱雀院の紅葉あるへし 朱雀院ハ後院之
其ある院の後の御所左京之三條朱雀ニ四町ニ通
らうてる延喜の比よりハ代々御つたへ朱雀院と申
結う十月の紅葉ハ紅葉の盛なる事なるへし
紫ちぬる月のそつる乃ところなんつけるなるへし
あくる年九月中旬の比ほひハ六条京極の家にはしめ
ておもしろきけはひ所にて紅葉見侍る也

あまくおもしろふなるもののあるつゝましきこえてや
笠やいへのうちむすめこの小宰相殿よめ入の家紀の
節之丈一人それそくちの大炊乃家之ちかいふ薬園よ
のせん
あしこちのかたみるめふりつゝおそこいふこゝろちふるさふ
あし乃をれきちいさなよせしく名風をあしこちのあしとふ
いつなるやうなかこゝろえてなほくくとりて第一要なく
そもくてかいうてゝくさんく
めでまちらんとれ路しし人もそれなきにさうるゝ外そされか
いさましうんといゝ西目もあるましうんへく
よろ殿いゝもえつゝ和哥乃ちるまきるなひんちと示つきさう
お綱その女をとり乃あさゆ之謀いゝ心ゝもさえなさそさ給

ちんいうきとるゝちゝ乃ろうしもうろうきあ事とい申ていなけ
なきさちつの事なれとれるしなこゝにあやすくまてあまと
か行なり
此罪九日りしてやなって十一月九日に比あのかたの中陰
をつるゝ此時いゝみ朱雀院の切そみってゐるゝをて
まのらうしこれのちつくいてなんとならし路殿くまとの
ふやいつちの御事しなくいましふせとてゝかつくゝの今ひ
おやつて
いふしてひとくつゝひ路いゝ東のみちなれも上る月のおゝし
きねきのひとる京よとなひ路とあつもの人此事なれ
つゝし文氣乃ちゆもりし乃仏事のこゝるの供あのひあつさて
あれを丑てしうかひてゝ心の一所もしをつあひあるひとくさて

絵ハ組系圖なとハ別人にかゝす
またちとまつこきゝしのまうきけれはくるくる草のとさしるさくろを せし
それはとるそくハなとこゝより絵をぬ草のとさしるさハさそ
まくきすいあらぬ物とこゝに之
ろうしうわつる人のなこゝろ為しく こゝろ君の事之
六帖 よはうしきちつさそわつるいそう神なこゝろ為しくおもひ絶る念
あやしくさとみ絵とく人ゝとくをきくあうしよは人ハ夢への事
わいまみとそのこゝ絵いふなり
かるきかひすしこゝなすハわそく又ゝあ絹こそのあはれとな
ゝとえくらん君のなし物を絵くいくうさくなきとを
かるこさかもていふなり
さうすハいかなる事なりとも書てもあまつめのこゝろなり

かふすハいてるぬ物のくはすきこゝすもこゝて絵かつるなとといひ
そこれみつゝのしくしくあやしくおもひ待る也
あるまてをすゝきて 和琴は菅掻とて神楽催するに
まうとかる事ありて五相するハすゝきこゝ為相するハあをのこゝきき
とこゝう文 筆ハも無三本曲絵はうるると菱掻といふとこゝし
屛風にもあらおわしくこゝてさ世絵もあらうくハ南の字欲樹のあさき
まもいるやをきあるあわくいとうをそあるうとあうにいてるるまう
せかるんなり
はましをきゝてひきゑろくもわすてあきくもしろきとゝもな
とあるはひきのうるそうりの事之
無心やもうかるきんよき 隆英明男女婚姻職之到
剛者男氣て女こゝて生文辞

やゝおきてみ給ふに色いろのうすやうなるにかきかはし給へることゝも
をきこえて　やゝおきて　やゝしはしありて給の詞ハしつゝかる詞也
あそひ給ひし故姫君のおきてみ給ふにつけて此祖母
の昨日まてと十ケ月の中なるをいまたひとつひとつをき給
ぬをいふ又此文字を暇し乃こゝろ事にて例なきにあら
ぬこのたもしハひとつへるあるへき事なり
袖ハみなとあはれと何おもふむらさきの露わけつる草の枕を
袖ハらなとい草の根をぬるゝといはるゝ之葉草中ね妹ハ
考しるかよあるらしうつみねはけるみ給ふ其紫人の
むらさき事給しそおもふその袖もけも根を寝まそへるゝ之
うつくしきゆへをしらぬハおもひつゝなるなる草のゆかりなりけん
実方集
くつるき枕へになつき身をむさしのゝその紫をとはまうらん

並　末摘花

こよなき程おほひのゆかしさいかしこ之　友並の御事之程なり
ときこえつゝはいてしおほひなくさみ給ふなり
さのしふんつきなみにかとむつゝしさひちるに　光もりハ姫君
のいまさたなるかにかくて源氏の君をあそひことはの中に
きこゆるふかくとかふおもふ

此巻ハ若紫の巻の並之源氏君十七歳の春より十
八才乃するもの給まてのことあり前詞をうけて花の宴と
せうあるつくきのしるなるもとのすゑつむ花を袖にふれ
もん詞を和かのまつむなりとひやるはさうしけいそへるなり
紅乃なハ末つさけハやうへてもうつむはうつ末摘花と

此女常陸守の娘君此奥のあつまよりてのぼりて之
せてよもあまさわし夕ぐれの露にをくれしそれの夕くれ
まつるまて数行のことに我身の春の花を遠きはこ
同じ小ふりしもそへておもひましなけるもわきしも見き
まひきえし君の花の春よりさくらの手紙に下枝に名ぐれの
巻にいつきもたくなりなから　行門集　此句つまて末まてのちまとる
露にをくれし　姫ハ之まし
はいよりしさ同しおぬ掛の人をもて早文君を桃といへり
桃ハ女のもしきをとるふなくしこのいとましさいいさり
かきれをもふくろへ名とのやれいたくの名ひをいとも若き心
ふたへわ
なあくしきかなるは　よのつゆなきは心なり

荻乃葉にさゝとぬへき名せの為よりは夕くれの花に荻人
おほかたにみえしはとみえしかは　後撰　名せの侭につまそしとたぬ名おほ
のもなしいかに思へまし　中務
承きれみとれとも　しくまとそし此の名よ甚なつとく
行し我荻の穂によれつくかもなく
承常陸のみこ　光孝天皇承和十五年正月任常陸太守
其後貞純親王代明親王元良親王承行し給ふ
命婦ハよく母のあとをつけてすみなくて家司の侍の恋のめ
れとさん後にかへりける妻ハ命婦か母なるやの母之
うちとけぬみか　情むきまてハなきことをいふ之
其のあそれなる人ハあつまき　伯耆源琴鐘子期知音之
言て先きに絶ふ人もなしと乃給ひく

百敷に紛ふ人々もこれおほかれども華やかなるさまけだかき人
なきごとくにふるまひてさきに紛ふ人なれどみてきこえいらへ難き
とりのこころく
くものうへにのみむかし抱かるるもあり侍る事ともみえたまひける
女（仲忠大将母）事之後女十五の年母にはなれぬ女一人のこりてあはれ
やともみなこぼちわたしてかへりあはれとなく野のや
まなかわたるに北の政大臣御殿ありて咲葉すみ給ひて
此家の中くだり給ふにあひくし給へりける君達の上よりて
おのしきわたちのもてなしみてまた此女のみなとでこのかた
からしのいひならはしける人もちきさ來まいらせしも
なるは井をそへたるかはひてあたれにおほせれく蜘蛛のおほ
云ゆかくあはひあらてとかねにいたりてえいひまぎらみける

人の家ならん様のしきれたる此家のいづかたより給はぬものつのた
あさまおもかしきなる様の心あはし人のいひ侍りてつくる蓬
木なきもみ木おほからむさむしのなすからつくろふ人もと
なくなまめかせてかひ出する草木のもしきなと時もとまり
れぬ様なるぬしちかきやといあはれなるへくむものをさる
ところどころへ枝なるに月影かいくまなくむしのねもうれ
わたなきとゝなる光はかやとせるあたりにていふいきところ
ちからなきなどしもむ人あはひやうにて中々
あはれにえせぬあさましきのはらはひ人々しらうおほ
くるさもある事とさやうなることもうらみつゝふかさ
さくしにくるにもあさましとさきに無礼とぞいふ命婦
常陸の姫君の事をとりあげて源氏の君をまつれる

まし心地なむうちとけゝるしよきてといひて、ふるさとの伝女は
うちとものしよつきたるはあさみとあられはなし来
ほありさまなきたさやうなるさうしきものめづらしきこてかと君
ぬをうつひなむ
こと人のいさんやうなとるなありはされて
参ぬは清あれとすなれそらくれなむかし
ゑきこきぬなてれなはのしろなすりて
わきぬすらくらな内よりそゑてゐすてなむあり
そむきまうら出することおもひつゝなし、其時は内より退出し給
いつくそては紫宸殿とあしとあるも年ことのきさはあらは
但此年まて蹴鞠のありし時布衣ときまうる例と
きこゆや

ことろしては大内山は出つると入りてみをぬいさよひの月
帝王系図注に、云々宇多院山陵在大内山仁和寺西とし
又は寛平法王の御後此所御信読はすみ給ふよるを
ちひの覧此雲風なとくれとも言ひつるは大内山よさよひの
そそれあらかなるへし、うてし又和元年には山陵使を被立
し時陵山陵遂がを参人、さて李部王記天暦二年正月
十日大内山大起居殿又寛平三年四月六日参子蕃頼
国西郭し雑お大内山ふて大内山は仁和寺の名所なれとも
後内裏のくするの用ある旧本記る内裏とかきてありけると
よあり源頼政の大内守護乃武士ならて三位殿の和歌し
あるは大内山の山守はとよあつはいさよひの月はやまかゝりぬ月の
心お違あるし。但しとすけいさよひの月おもしろうとよとあつ

十六日乃月にいへるまでやおもひつゞけし
里よりぬ影をいふなれと八月の入さの山をまれゝるつぬれ
さてよらぬ月の光をはみをとりあはすこの入さの山まてと
まつぬる人はなききはみたひしようぬ事をよむとぞきこゆる
うくさつゝひあらんふりつゝ花給さん
花よりは中納言の詞し随身は近衛づかさの官位にてさく
亦つまて相なり
このなてしうち成ありてゑ行まぬを　むらくの君の事く
北の方らゐでさても事をやゝくなしてやり給ひし
中将つむ乃とく源氏君に中納言文をつかはすれとら
わにあへすなさいかのをくにふ徳なる故くなるべし
さらくのあそは小みなしらや小みなのれぬとかしけ

花は中納言の詞しつすめるといふむくをそのめしけるんぞ
さまいふをそひすろまふまうと　花は何んしのやとも
人ゐさしきうとおほふはいてくゐさし　中納言乃心源氏の
いちんとおもそなゐいはみの給ひともや家るをとみ給ひそれ
さて乃給ひとろきて中納言にては人はすらてみゑるはをゝも
ひとねくくおもへるく
いつこふくそおかくまんしらうくるゑ
まんけるは練磨するとにけんくうらおもうぬんくく
人の心みやうゐならとのかくおもにておもさうのこゑなさん
人の心は女乃心似にておもつるにさくぬおとろのあやは
ちるなる事のあるとて花は大てのことをして練給ふと
らくしきてはをさらくうさきなるか

令ぬしといふ詞よりてさてハ随分くしきつくいちきゝ人なら
ハしとや しゅふくこゝめしきハおすゑるましき也
人をまめにはおもひは　花つくりの事也
ゆゝきぬものをとゝ　又かしめるくすゐる名の相似とそ
云なり
て後えさしいそ給ぬ　文乃返すものなき事也
なまめかしく見とゝさるはらまふあして
なふやかやハなつかしといふ詞しよろこぶるてハなれしき
やましろきをるすらまふあしてけしあさまろはのてすや
はゝえそつきとゝし
おのつからなるやうよりてきてあつめみとゝめ給ひくせの作る給ふ
令ぬし源氏の作事給ひ御子さとし　つる女給ふ事

をとこ見せ給をぬく世のをとちしつかはとし
香ひのゝ　香字拊云探梅檀樹葉皮春節乃香
改云葉皮丈東彼香俗云衣比新空家方く書彼
香ありこれとえひの香といふ一云薫衣香乃一名
一云すくへく薫衣乃名之
いく亦いひえる名そこにさもぬりん香るいひ亦といぬらの
名ハ童部乃猿也ならを給せん絹糸しらぬ無言
無言とうそえまうねてといひく何うえもしおもしして
後ねいそぬ事をするし名よしふハ名るまとし　栖遑と
いこまてえつてまとハしあるやはうえそる人さまてけ亦る
まつむのしてへいし名給をぬ事を見る名つましいひ無
いえそるとよあり　此れうちふへくのとくれ世俗乃

筆なとおなし用ゐるなり
ゐねつきてこらめん筆をさんからそこてこそへまうけおるハあや なきさ
毛てまうるゐつくといつるまうて絃つきてこらめん筆と
よめんりいうちむるハロをとゝらてねいをぬをいふへく
くゐつきてねいをぬ筆ハ八端者との端筆乃时流布ハ
とゝゐといふへし歌僧師声をとゝらへとれし後端
歌ともやらむるへし　この事も通するへし
いちぬをいひつゝまませると声也なのうえをしてめゐるなくるしうわ 声ゝ
ゝまいふ絃水のうさきくらいろてつまつそいつるまさせう
此のみえうてあ逆すとなへれ
あ逆すと云へれハうれいまいしあゝぬへし
朱雀院乃御筆あるへき筆承此字までと日时後の並し

夕霧のまちてきこしをこしまうてみぬまいらせさせつるよこのあこゑ
ねうさきてのかううて音ゝうきハ女ろえはききとなくへし
天ゐらまちいてんおちとゐへ御ハ出給りんとなすりぬ歌の調ある下
このつくへ
あうさゝのすうまてうゝき声ゝきせしくらい給ふへり
中さうらハ中比の給之上下きゝしきとハ給しゝこさるゝせぬ
をらふへく
大鼓ゝゝ殿んのをこゝまうてまうらしまいせて
礼記曰鐘鼓在庭琴瑟在堂延喜四年三月廿四日
被見舞楽右大臣时平公仰令推大鼓治部自
打くことゝ承大鼓ハあすれ堂下にて打するへし但寛
治五年五月廿五日殿上競馬之时 白河院 ここに自打

太鼓打出時置臺上之
ぬるそまちれ打く　新絃ぬすみくさわうゑし布を張之
むらさきの指貫をてとりはきては
むらさきの色めきしハ二條院へうつり給年ハ打華之
うるてぬる月のころなり
沸立いひそく　字部卿純天暦五年十二月九日ハ落勝流
香折數四枚用桃色ならかのおろさするしゐそくかつき
く菓桃色ハあるき金碗のそらひをとそく
ゆるしなのうらなくうるさくしくみゆる
延喜十七年参議之善清行請禁深紅衣服奏議云
但浅香帳受末及大色も不在制限長保二年太政官
府云紅染之服堤防自存中緯此絶下読之数我是

用紅識示用紫染雖禁其深染末嘗制其深色之
菓それらの井むらさきハあこさなをと禁色とあつもあさきをと
ゆるし色とい比制禁に及ぶ者れは用ゆく様くさ
常の人の衣服さるハ禁色なとしやけるを用せんれうさ
またしあらみる様へる深色なと称し　いろとて子読ハあやま
すこし様るしなのうすあはしみゆるハ紅のあれ程色ととい子
くこし
うちき一重さる　袖は大小あり小袖ハ其一の人或ハあるし
なとのこゝろ様くきぬのうくる吉兄そのうへは小くち
きぬさるすそハ袖まとゝるきるえおもし乞すそなう
くろきこち比とハ染のるこゝなくろしうるをいふ下し
ぬるきハえん打ぬハ江ハ半さ着蓄宮参入時重明親王

桑野毛車花黒鶴書ハ亡と見れは有若逸淫
書一條為朝為主抱見ハ亡大悲之
きし任官　改官ありとしるして
朝日てられ新のきらひみせけるつかなさうてのしれらくし
（賢愚集）新らしやと新はらしるさしてん所のことひろくのきれ
まつの露めしはらしくらきるふつめなと
（たそ）かんらるハ雲の面やさる消ゆくる都いのくのころなつさまうと
く東雲の面ハ花ろこさまう次けアともなやうなれハ
あくかきたるとしふつや
そのかいひしもしくのうと　面影抱られ月
たる以ついひり事く
ちゃんくして志のなし　蒲ちかハなくる雲ハしりたなみの

志のまよふしてれうらかみる　挿し衣てと
花紙袖のあまいて　袖くしまとらわ
あくしめ世そく門ある女せん名めし
あるまるうしらの雪をみる人そおれぬりしてあさの袖をな
いさのそくく胡のそくなり
ようき姉いくうくにさすと
白氏奏中吟日幼て形不敬老て袴無温とあるを
そうて幼ちと云ふをいまししなる女なよく老ちとハおき
れなうく書う袴無温といえしとて大補な火をと人ハ
うせまらく
さめやうたるさのる　よくしきみつきなし給ふなり
上すし此詞あやしなり

おつれさまして見るへき事なりとて
おいらかにいふへし
つれつれなるころのつれつれは被かへすなる方の御のこ
いつ秋源のつきんなれはきみかへろの除きつゝはは
もてあそひにはなれそめつゝのこともあるは別なる本にも
はくさ…のあるしはえぬるは源氏のきみんえすお
同しき所なるあめのこと御補なるまつむまりつるを入る
きぬをかへし出しなり
あさましのくちつきや　まつむ月の事に
いまやうもののえ花なれはよしく　草花おほえ乞け子内親王
紅梅大納言とまいる殿内の御使として　中納言を居し奉り
きこしめすところへまいりてこそしれなる私事やとかもなし

こはなお絵にわたしてよつゝしのこちきつこさみれはまや
なかにちきそあそはすやしとかは紅梅のこれをいふなり
そらくいふこれ紅なるもあつは又紅梅なるもあつめなるものなは
なは此いひてきまするなるなれもいはすやしとかいつて大納言
おしいろとおなしきさるそゆるはましくしらすは紅のて
きつくるよわれは梅にるなる似ようるなるにもらさるそゆる
はよしきてはいひつつ
なかしの中しく心ときくつまやかなる　さらはいまは
きぬといひそこのなかしはいまやうなるのとしをめるを
同なたまるはいかすや
わかくの月なる　つまけとあるなはあさしと月なるは紀
すそわるるやきゆしとらにあやまわらなるつましらみなてたし

やうきんすゑつむの御めくし月来まして侍しけしやなの
なしにはしみとるめ侍らぬ年はあらしとおもふなり
紅の色にそめ給ひしとは色をすこしくのこしての給ふ
命婦かすゑつむのうしくつねにしるく
ゑかの心あるてうはるのにいさてはとしなくてとふらんと
又まいるたるまゝや末摘の口つきのせめて命婦わすれ
あさうしの人々
つるさきさくらん人のはなねやあらん　末摘のさくらきさる紅
色あさましとおもひなるとさいふ人のするねさの命婦
まていたちはしてあはつる也
かゐるしくさるや　くるやはあるてなけふきるらく
あやしくも色くさしとて命ーのまへかねとうつくし

きるとも色くさしと命婦をみ侍らんと
人志らぬ人とさそ御色よりきこえはいこのあかあり
源氏の君の色よわもいひなし給ふとすゑつむの年をへ
そらぬこともあやしくそふこと
あるやすむきさあさいかなる色はこのめる花のにほあ
もやみ給らん　政事要略御門府風俗云
多く良女乃不ぬかに禄利好年相感此原始
年相にはそのすゑきる一人の女房乃といふあはやは
きりふはしつすやなるしはふくとしら色ねわこのむ色
鼻のあかき人するふうにも色ねりこのむは侍つ府の
風俗よりいひて多る詞と又くらぬ花もいきて
梅の色といひつる年をときこあやまり侍るなるべしと此詞はみう

あれなるは常にまいりかよへる花をみてさめり
このほか又一人のめのとれいせい太宰の大弐肥後の守か女は
あつきせしは二人乃り若とやあつてんと思ふ女人
いふく
あくぬよしとつゝる中の竒なるさるみていとゞみえ見えしや
拾遺
竒なる中のあやしいとうつきあぬ故とさ見玉ふ
ともしみよきや神さらん人かみよの人たちぞ
すいくいそてつてそ
しかるそてる給ひて人のそくはつゝる
源氏の君乃御料とて人のまうてさぬとさるうすゝ
つむのうくをとくら給へるく
我ひ人とさつむなる　すゑつむはなとはいひしわめ成な
とはいさよりの作りし作者しおもふ給ひと批判しける也
うらしおもしろくもきれて　男踏哥は正月十四日の事
く初音の巻にもくわしくさるゝてし
いとおかしかるしねつうは　此おりしきはおもしろきわりことさむ
給ふなり末摘花をとみあそしうわしきことも
らんおのいはせそうくふいてしらさもうとみ給は末つむのふ
此給ひてそらよのつるなるは源氏のをとくわ給ふし君達をさ
なきしき給へる様くし
さしとあをおしなれめりしき後をとれなりうそきみう
此つあの詞説くあり一まい源氏のをとり給ひてこさぬとその
中よるうゑきあうきるをとみいて給へ一云表は
すゑつむのうへる末にかをとて給へしくおもひ給へ

くまなき井ハなつかしきいろもともや
むかしさきの心も君代年たくれち井ハ紅印をとらせし
そくろめ　山海經云東海之黒歯國其俗婦人歯黒
染之某旧本ハ東海の中の國々の俗なるなりぬるやむ
かしハいともうつくしき女ハあまたの孫をつきされハ衣裳のおいらせの
あらかしらまて陰の姫君とも十歳になるまてにくろめを
ならさりし
くろかしきおりとみくあつても　是ハまつむの年こ
かみなかくさめ俄にきぬかへるところをとつけてするこむの代
るとこるなり
平仲　平定文ハあさかなく
たましきさみえくあるくわかれる
あくるむハ笑たる梅のやうなる也といるはいて桑楽梅を
杜子春と詩につくられ
あるし　仁和寺川乃御幸次八条院為作寄ハ
興之使初遊踏隠と見え更アラ池天寛二年之
之東南階の方るなる庭をとこらてよ歳する
此をとらへとて風華をとゑんりしむころなる
つくたにさかり楽御下にあらむとあるか
あるいとをしくさみ人の作りをとこ
是ハ物語乃作者の詞を云つかんの事こ

日本政府圖書
大日本帝國圖書印
内閣文庫
内閣文庫
数 36 枚
36

国立公文書館
National Archives of Japan